

【枕慈童 解説】

原典には本文の他に、背景の説明が「太平記 第十三巻」から抜粋し、物語として原典の頭注に記されているので、それを以て「解説」に替えることにする。

魏の文帝の勅使、薬の水の水上を尋ねて酈縣山に至り、慈童に逢ひて菊水を授かり帰る事を作る。慈童の事は、太平記に、昔し周の穆王の時、云々。

或時、西天十萬里の山川を一時に越えて、中天竺の舍衛國に至り給ふ。時に釈尊、靈鷲山にして法華を説き給ふ。

穆王、馬より下りて、会座に臨んで、すなはち佛を禮し奉りて、退いて一面に座し給へり。

如来問うて宣はく、「汝は何れの國の人ぞ。」

穆王答えて云ふ、「吾は是 震旦國の王なり。」

佛 重ねて宣はく、「善い哉 今此會場に來れり。我 治國の法あり、汝、受持せんや否や。」

穆王の曰く、「願はくは信受奉行して理民安國の功德を施さん。」



その時佛、漢語を以て、四要品の中の八句の偈を穆王に授け給ふ。今の法華の中の、経律の法門なりと云う深秘の文これなり。

穆王、震旦國に帰って後、深く心底に秘して世に傳へられず。

此時、慈童と云ひける童子を穆王 寵愛し給ふに依つて、常に帝の傍に侍りけり。

或時、彼 慈童、帝の空位を過ぎけるが、誤つて帝の御枕の上をぞ越えける。群臣議して曰く、其例を考ふるに罪科浅きにあらず。然

りといへども事あやまりより出でたれば、死罪一等を宥めて遠流に処せらるべしとぞ奏しける。

群議止むことを得ずして、慈童を酈縣といふ深山へぞ流されける。彼 酈縣といふところは、帝城を去ること三百里、山深くして鳥だ

にも鳴かず、雲暝くして虎狼充滿せり。されば假にも此山へ入る人の生きて帰る事無し。

穆王なほ慈童をあはれみ思し召しければ、かの八句の内を分たれて、普門品にある二句の偈をひそかに慈童に授けさせ給ひて、毎朝に十方を一禮して此文を唱ふべし、とぞ仰せられる。

慈童遂に酈縣に流され、深山幽谷の底に棄てられけり、こゝに慈

童君の恩命に任せて、毎朝に一反此歌を唱へけるが、若し忘れもやせんずらんと思ひければ、傍なる菊の下葉に此文を書きつけ、り。

其より此 菊の葉における下露 僅に落ちて、流るゝ谷の水に滴りけるが、其水 皆 天の靈薬となる。

慈童 渴に臨んで是を飲むに、水の味ひ天の甘露の如くにして、恰も百味の珍に勝れり。しかのみならず、天人花を捧げて來り、鬼神手を求ねて奉仕しける間、あへて虎狼惡獸の恐れ無うして、

却て換骨羽化の仙人となる。是のみならず此谷の流の末を汲んで飲みける民 三百餘家 皆病即消滅して不老不死の上壽を保てり。

其後 時代推し移りし八百餘年まで、慈童なほ少年の貌ありて、更に衰老の姿なし。

魏の文帝の時、彭祖と名を替へて此術を文帝に授け奉る。文帝是を受けて、菊花の盃を傳へて萬年の壽を成さる。今の重陽の宴是なり。

それよりのち、皇太子位を天に受けさせ給ふ時、かならず此文を

受持し給ふ。是に由りて、普門品を當途王経とは申すなるべし。

此文我朝に傳はり、「代々の聖主御即位の日かならず之を受持し給ふ。若し幼主の君 踐祚ある時は、攝政まづ之を受けて、御治世

の始に必ず吾に授け奉る。此八句の偈の文 三國傳來して、理世安民の治略除災興樂の要術となる」とあり。

枕と菊の事を作れる慈童の物語なれば、枕慈童と名づけ、また 菊慈童とも名づく。

右、原典の頭注を書写す。

補注

- 普門品 || 法華經第八卷第二五品の「觀世音菩薩普門品」の別称
- 踐祚 || 皇嗣(皇太子)が天皇の位を承継すること
- 三國 || 日本、中国、インド
- 理世 || 世を治めること

令和四年十月三日

大中臣正比呂

